

◆連載-Vol.23

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948 神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年~2014年千葉大学客員教授。木の建築フォーラム理事、日本建築学会建築文化事業委員会幹事

現代建築の開拓者たちとその軌跡 5

白井晟一の続き

白井晟一に関連して、もう少し付記しておきたい。白井が1981年に発表した「静岡市立芹沢銈介美術館」は染色家の芹沢銈介の作品を展示するための美術館であり、芹沢自らが展示作業を行った。ところが作業中に倒れてしまった。それを新聞が採り上げて設計が悪いと書いた。染色は光があたると退色するため、外光は遮断しなければならない。ところが、白井は少ないが効果的に光を採り入れる。芹沢が倒れたのは光の差すところを避けながら展示していたための過労だという。

この記事を読んだグラフィックデザイナーの亀倉雄策は、「当たり前だろ」と一言。その理由を「施主は建築家を選ぶ権利があるんだよ。白井が設計すればどんな空間になるのか、わかりきっていること。それがいやなら他の建築家に頼めばいい」と明快に一刀両断。

さて、この問題、どう考えるかは一筋縄ではいかない。すでに村野藤吾の稿でも少し触れたが、ぜひ考えて欲しい。

吉村順三 気持ちがいいディテール

さて、順番でいくと吉村順三、丹下健三、吉阪隆正と続くのだが丹下はすでに記したので、吉村順三に取り掛ろう。

東京に生まれ東京藝術大学で実測と観察を通して日本の古建築に触れたという。卒業と同時にアントニン・レーモンドに師事し、1941年に独立。ディテールには定評があり、住宅作家として一世を風靡した宮脇檀の師匠でもある。

吉村自身の山荘でもある「軽井沢の山荘」(1962)は代表作のひとつで、打放しのコンクリートで持ち上げられた2階に居室がある。くの字型になった平面と全面的に開く窓。まあ、とくにこれといった特徴がないと思ったら大間違いなのは、とにかくディテールがすごい。

かつて宮脇が「暖炉を設計したのだけれど、うまく煙が煙突へ流れてくれない」と言うと、吉村は「そんなの簡単だよ、煙の気持ちになればいい」と応えたという。この話をするときの宮脇は眉を八の字にしながらも嬉しそうに頭をかいていた。

そんな宮脇と組んで、いろいろな建築家のディテールを探し出し、解説をする「人間のためのディテール」というページ

を2年にわたって『新建築』に連載した。(これをまとめたものが1984年に丸善から同名の書籍として出版された)

探しはしたものの、その多くは「人間のためではなく、ただ納まりのためのディテールだ」と宮脇は見做し、結果的には吉村のディテールを主に採り上げることとなった。

たとえば窓についてもさまざまな仕掛けがある。吉村の設計では多くの窓枠が壁の中に引込めるようになっていて、室内から目障りにならない。外を見るための窓ならば窓枠など邪魔なだけ、ということで考えられたのが「落とし框」。窓枠の外側に窓枠分だけ下げたところに敷居を設けたから室内から窓枠が見えず、その分だけ視界が広がる。

また、窓際に植木鉢を置く場合なども同様で、鉢が見えないように外側の一段下げた場所に鉢を置く台を設置して室内の視線から鉢を隠す。換気のために窓は開かなければならないが、全部開ける必要はなく、換気に必要なだけ開けばよいし、夏ならば虫が入ってくる。簡単なフックで窓枠とつながる網戸が戸袋の中に隠れていて、それが一緒に出てくる。

このようなディテールは開口部に限らず、家のあちこちにちりばめられていて数え上げたらきりがない。どうしてこんなことが考えられるのですかと直接伺ったことがある。その応えも至極単純で、

「この方が気持ちがいいだろ」

「…はい…」

これ以上質問を続けられる？

現在ではだいぶ普及しているOMソーラーの原型は吉村がつくった。ひとつの石油ストーブで一軒全体を暖めてしまうシステムである。家全体に空気が流れるようにしておき、1階に石油ストーブを置く。ストーブで暖められた空気は上昇して家全体に回る。そして棟の辺りに取り付けられたシロココファンで上に溜まった空気を強制的に下に戻す。このとき、煙突を二重にしておきその間をダクトとして利用して空気を暖めながら下げる。吹き出し口は地下で、そこに用意されているパンに水を張って加湿され、1階の室内の戻される。上昇した空気の取り入れ口のそばにはダンパーが用意されていて、夏場はここから熱い空気は外に排出される。

これを奥村昭雄と石田信夫がさらに発展させたのがOMソーラーだ。「ホントのパッシブってね、陽が差す室内の床に黒い絨毯でも置いておくだけでもいいんです。そうすれば昼間は蓄熱してくれて夜になると放熱してくれます。これで暖房費が浮きますよ」と教えてくれたのは石田だった。

そんな石田が設計した国立の住宅が面白かった。防火の点から都内の木造住宅は外壁をモルタルにすることが多い。そのモルタルを濃い色にして集熱効果を上げて外壁を集熱板とする。壁内の間柱は1本ごとに上下を切り欠いてラジエーター状に空気が流れるようにする。壁内で暖められた空気を室内に戻し、上部まで上がってきた空気は吉村の石油ストーブと同じ要領で室内を循環させる。必要な設備投資はシロココファンのみ。石田は椎名英三とともに宮脇の重要なスタッフであり、当然宮脇仕込みのディテールを十分に使いこなしていた。

吉村自身がどこまで考えていたかは不明だが、吉村のアイデアが後継者の努力もあってこのように発展したのである。その意味ですべてにおいて合理的な設計だといえるのだが、その根底には宮脇が言う「人間のための」という気持ちが溢れていた。

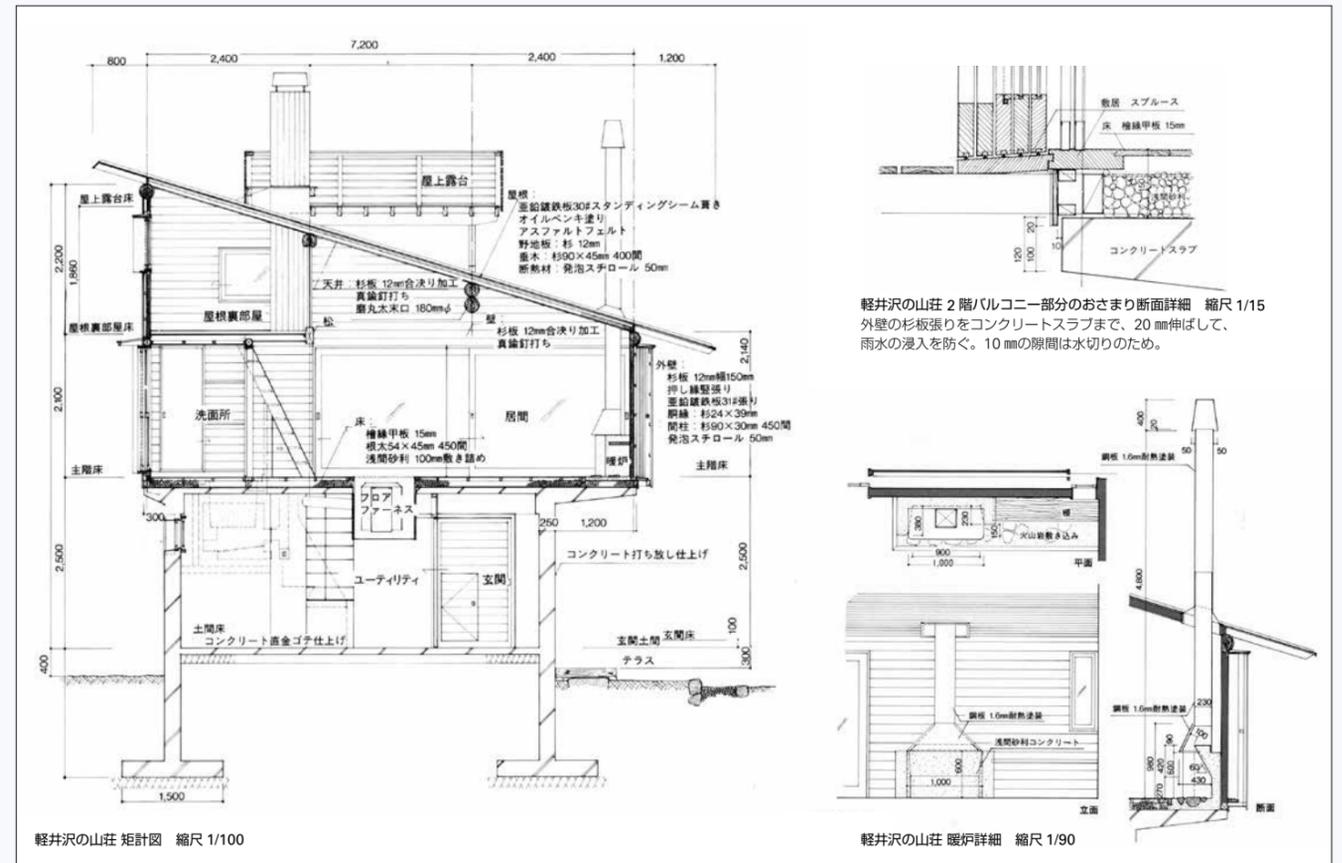
新宮殿降板顛末

吉村は皇居の新宮殿設計にも取り組んだが、途中で宮内庁と意見が対立して辞任した、というのは建築界でもかなりショッキングなニュースだったが、詳しい経緯は1965年7月11日号の『朝日ジャーナル』に掲載された吉村自身の文章が明らかにしている。

ここで吉村は、建築について技術とともに芸術性が重要だと説き、日本の伝統の中には先人の大変なエネルギーと洗練が加えられており、桂離宮などは世界に誇りうる立派な芸術作品となっているといい、それを全うするためには竣工までひとりの設計者の責任において行うことが正しいと吉村は信じていた。

ところが、吉村に委託されたのは基本設計で、実施設計は宮内庁が行うと明言されたために、設計者の立場を明確にするために辞任したと述べている。

この吉村の姿勢を、現代の若手建築家はどのように評価するのだろうか。(続く)



出典／「小さな森の家 ―軽井沢山荘物語」吉村順三(著),建築資料研究社,1996年